

大慧宗杲とその弟子たち (四)

——大慧の著作について——

石 井 修 道

今回は大慧宗杲それ自身の著作を整理してみよう。大慧の著作について述べた記録として、立正大学図書館に蔵する宝祐癸丑の年(一二五三)に天台比丘徳潜の募縁による径山明月堂での重刊の宋版『大慧普覚禪師年譜』に依るのが一番よいと思われる。寂後の記事として

其八処九会陸堂語要普説小參譚傷機縁長牋法語、無慮數十万言。参徒道印編為六十卷、奉置干庵。宗璉雲密性禪宗演浄智居士黄文昌、裒其綱要、離為五冊、刊行於世。蒙詔賜入大蔵、同聖教以求其伝。とあり、道印の編になる六十卷、黄文昌などの編になる五冊と入蔵した語録について述べられている。

ところで現存する大慧の著述を彼自身が編集に影響した著述類を除いて、整理してみると大きく四つのグループに分けることができる。それは甲、三十卷本『大慧普覚禪師語録』、乙、一冊本『大慧普覚禪師語録』、丙、四卷本『大慧普覚禪師普説』、丁、三卷本『正法眼蔵』である。以上の四つを具

体的にすることによつて、先の『大慧年譜』の内容や入蔵の過程をみてみよう。

甲、三十卷本『大慧普覚禪師語録』
これが一般に使用されている大正蔵経所収のもので、大正蔵経の原本になつたものは明蔵である。この明蔵は縮冊蔵経がそのまま受け継ぎ、大正蔵経は『大慧宗門武庫』を別にとりあつかい、『大慧年譜』を削除している。さて明蔵自身は東禪寺版の宋版大蔵経を受けたようであり、開元寺版の宋版大蔵経は普説一卷を附加した三十一卷本である。大正蔵経に宮内省図書寮蔵五山版と校訂したようになつているが、実は宮内省図書寮蔵五山版と校訂したものは現存せず、大正蔵経の校訂に使用したものは明かに開元寺版の宋版大蔵経である。この開元寺版は

住持臣僧紹玉、謹募檀信、刊為経板計三十一卷、入于本寺、印造毗盧大蔵経院、用広流通。(以下略)

とあつて三十一巻本であり、この附加された一巻の普説は未だ近年の刊行された蔵経の中では活字化されたことのないものである。

このような蔵経の性格から、改めて先の『大慧年譜』の記録を見てみよう。その第一に書かれた道印の六十巻本の性格は、現存する資料からは不明である。第二の黄文昌などによる五冊本は同時に開版されたものはないが五冊共に貴重な諸文献が存在し、その五冊本が入蔵された三十巻本の原典となつていえることが結論的に言える。AとEの五冊本と三十巻本とを图示すると次のようになる。

- A 語録……………巻一〜六
- B 語録偈頌讚仏祖……………巻七〜十二
- C 普説……………巻十三〜十八
- D 法語……………巻十九〜二十四
- E 書……………巻二十五〜三十

このうちAについては大正蔵経に甲本として徳富猪一郎氏蔵五山版が校訂に使用されているが、このAはBと共に二冊の語録として独立していたものであり、西尾市立岩瀬文庫に貴重な元版の完本がある。ただ惜しいのは最初の序文がAB共に欠けて補写されていることである。この二冊本はまた内閣文庫に林羅山の筆として写本が現存している。己蔵は黄檗版をもとにした版で、五冊本のうちのABではなく、明蔵の

系統の江戸時代正保四年本である。

Cについてはもちろん丙の四巻本と異なるものであるが、京都大学の人文科学研究所の松本文庫にのみ存する貴重な五山版がこれにあたる。

Dは岩瀬文庫に元版が存在し、もと雲頂山大明禅寺の塔頭の常住であつて、前に記した語録は善慧軒のもので経路を異にして、奇しくも岩瀬文庫に存在するに至つたものである。

Eの書については最も多く開版され、紹介もあるから説明を必要としないであろう。このEは朝鮮でも多く開版され、大きな影響を与えたものである。

以上によつて五冊本の存在が確認され、五冊本と三十巻本との関係が明確になり、入蔵の過程が解明されたのであるが、五冊本に共通していえることは、すべて浄智居士黄文昌重編である点でこのことは注目すべき点でもある。そこで道印編の六十巻本について推測するならば、巻数は多いけれども内容的にはほとんど変らなかつたのではないかと思われる。法語の巻末には

大慧禪師說法四十余年、言句滴天下。平時不許參徒編録、而衲子私自伝写。遂成卷帙、晚年因衆力請、乃許流通。然在会有先後、見聞有詳略、又賢士大夫所得法語、各自宝蔵無縁尺覩。今之所収殊為未及、俟更採集別為後録。文昌謹白。

とあり、書にも同文があるので六十巻を省略したのではな

く、大慧年譜の「哀其綱要離為五冊」もそのように解すべからずである。

ここに五冊本の開版が同時になされたことは想像されるのであるが、それを証明する宋版は一冊もなく、推測するならば少くとも二度の開版があつて「左右雙辺、有界、十一行二十字」を共通にし、匡郭内の大きさを「タテ十七・六、ヨコ十二、三」と「タテ二十・三、ヨコ十五・五」の二種類で、後者は宝祐年間（一二五三—一二五八）の重刊版、前者は隆興年間（一一六三—一一六四）であろう。

乙 一冊本『大慧普覚禪師語録』

この語録は早稲田大学図書館に蔵せられる宋版であり、続藏経はこの早大本を底本にして二巻本として収めている。この書の特徴は『大慧普覚禪師宗門武庫』一卷と前半をほとんど同一にするものであり、宗門武庫は市川白弦氏が全部を大慧のものとするに疑問を呈せられるが、その解決のためにも看過することのできない著である。宗門武庫は臨済宗で重要な位置をしめ、また多く読まれ、開版されてきたが、宗門武庫の一部分はすでに大慧自身によつて否定され、大慧の認めたものは他にあつた。それは一冊本『大慧普覚禪師語録』の前半の『雑毒海』であり、この早大本といつてよいであろう。この一冊本は早大本のみしか筆者は見ることができないのであるが、早大本は次に述べる丙の普説が混入してい

大慧宗果とその弟子たち（四）（石井）

ることを指摘しなければならぬ。早大本の最後の一紙は四巻本普説の卷三の最後であり、現存する四巻本普説の宋版の唯一の一紙である。おそらくこの一紙が混入しているだけではなく、紹熙元年（一一九〇）の祖慶の序と跋もそうであろう。宗門武庫との内容比較などの問題を今後に残している。

丙 四巻本『大慧普覚禪師普説』

この四巻本は宋版大藏経に入蔵されなかつたものではあるが、川瀬一馬博士の研究によると唯一の松本文庫本の普説よりも多くの五山版がある。この四巻本普説の五山版の完本は大東急記念文庫で見ることができ、この本の序は先に指摘したように祖慶の手になるものであり、早大本の宋版をまったく被影にしたもので、おそらく祖慶の序はこの四巻本普説につけられたものであろう。この祖慶が『拈八方珠玉集』の重編者とは同一にすることはかなり無理があり、この四巻本普説こそ黄文昌の願いをかなえたものの一つであらう。

丁の『正法眼蔵』については、前回すでに述べたのでここでは省略する。

以上、大慧の著述を整理しながら問題を指摘してきたが、個人の語録の入蔵の過程も一応理解できたと思われる。貴重な諸本の紹介も十二分にはできないので、詳しい報告は駒沢大学仏教学部の研究紀要第三十一号で発表する。

（昭和四十七年度、文部省科学研究費の奨励研究の成果の一部）